



馬耳東風

「剥製は絶滅したニホンオオカミか、中学生が論文発表」のNHKニュースが昨年流れた。発表したのは中学1年生の小森日菜子さんと国立科学博物館、それに山階鳥類研究所の研究チームだと報じた。つくば市にある科学博物館収蔵庫の特別公開イベントでヤマイヌとして保管の標本を見つけ、100年以上も前に上野動物園での飼育を突き止めた。「額から鼻にかけての平らさ、前足が短く、背中黒い毛」などのことから公開記録をまとめ専門家の指導を受けて発表したところ文部科学大臣賞を受賞した。論文を発表する原動力は探求心だと実に素直に語っている。ニホンオオカミは絶滅したとされ、既存の剥製標本は3体（東大・科博・和歌山大）のみであり追加されるとうれしいことだ。博物館は標本を残すことで人とコレクションを育てると結んでいる。何ともうれしい、実にうら若い科学者の誕生である。

内臓を取り除き木綿材など詰め込んで復元され、ありし日の姿を剥製で見る鳥類や野生動物は多い。また、彫像として残したいという願望は、秋田犬のハチ公や南極派遣犬などのモニュメントがある。ともに過ごしたペットの写真を手向けるだけでなく、実物を剥製にして保存するというものもある。最近の剥製手法は、内臓を取り出しフリーズドライ法で生きていた姿を再現する。極低温と真空のアプリケーションを組みあわせ、細胞内の水分をすべて除去し腐敗を防止する。当然、脂肪・内臓・

体液は除去され、原則的に外皮をはがさず筋肉骨などを残すのでリアル感があり、長期保存がかなう。ただし目を開けるには義眼が必要だ。最近、これとは別に見応えのある動的な表現で生工融合によるロボット生物学が台頭してきた。

最近目にしたフェルトを素材にした美術工芸作品展で、リアルなかわいさで野生動物の作品が展示されていた。特にシジュウカラの目立つネクタイは、立派に紳士役を引き立てていた。また、若冲は江戸時代後期の最近話題の写実画家で、ニワトリの絵を得意とし精緻な構図に人気がある。「鶏群図」は華麗に堂々と描いた作品で、今は絶滅したような品種もあり学術価値も高い。絵から飛び出したような立体等身大のフェルト作品は、まるで生きているようだ。いかにも往時をしのばせ、餌を求めて地面を突つつく姿そのままに見える。また、屋久島の「シカの背に乗るサル」の作品は、縮小されているが実にこっけいで愉快的な共生生活そのものを浮き彫りに表現し、まるでヒトと一緒にの生息空間に居る感覚になる。

高崎市内にあり、最近にわか注目された古代文字「ユネスコ世界の記憶 上野三碑」は、飛鳥時代から奈良時代に漢字のみで刻まれた古代を記憶する山上碑、多胡碑、金井沢碑の三碑を言い、国内最古のもので近くにある東国文化の中心地としての古墳群の存在とともに国の特別史跡になっている。年頭に当たり記憶と言えはIT技術に頼る時代、歴史的に価値のあるものを未来に記憶し引き継ぐ手立てのいくつかを考えてみた。（柏）